

目次

はじめに

亭子院歌合日記……………1

太后御記……………5

伊勢日記……………9

土左日記……………19

蜻蛉日記……………39

和泉式部日記……………109

紫式部日記……………149

更級日記……………189

成尋阿闍梨母集……………233

讃岐典侍日記……………253

音にのみ聞けばかなしなほととぎすこと語らはむと思ふ心あり
とばかりぞある。「いかに。返りごとはすべくやある」など、さだむるほどに、古代なる
人ありて、「なほ」とかしこまりて書かすれば、

語らはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声な古しそ

これをはじめにて、またまたもおこすれど、返りごともせざりければ、また、
おほつかかな音なき滝の水なれやゆくへも知らぬ瀬をぞたづぬる

○痴れたる―「知れたる」、「強
いたる」などの整定案もある。

これを、「いまこれより」といひたれば、痴れたるやうなりや、かくぞある。

人知れずいまやいまやと待つほどに返り来ぬこそわびしかりけれ

とありければ、例の人、「かしこし。をさをさしきやうにも聞こえむこそよからめ」とて、
さるべき人して、あるべきに書かせてやりつ。それをしもまめやかにうち喜びて、しげう
通はず。

また、添へたる文見れば、

浜千鳥あともなきさにふみ見ぬはわれを越す波うちや消つらむ

このたびも、例の、まめやかなる返りごととする人あれば、紛らはしつ。またもあり。「ま
めやかなるやうにてあるも、いと思ふやうなれど、このたびさへなうは、いとつらうもあ
るべきかな」など、まめ文の端に書いて、添へたり。

○返し―底本、かかる位置に書
写していることに注意。以下、
上巻に散見されるかかる書写状
況ないし文体は、「私家集を内
部に抱え込む形」(斎藤菜穂子)
とも目され、興味深い。

結婚成立

※天曆八年(九五四)秋

いづれともわかぬ心は添へたれどたびはさきに見ぬ人のがり
とあれど、例の紛らはしつ。かかれば、まめなることにて、月日は過ぐしつ。
秋つかたになりけり。添へたる文に、「心さかしらづいたるやうに見えつる憂さになむ、
念じつれど、いかなるにかあらむ、
鹿の音も聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな」
とある返りごと、

「高砂の尾の上わたりに住まふともしかさめぬべき目とは聞かぬを
げにあやしのことや」とばかりなむ。

また、ほどへて、

逢坂あさかの関やなになり近けれど越えわびぬれば歎きてぞふる

返し、

越えわぶる逢坂よりも音にきく勿来なこそをかたき関と知らなむ
などいふ。

まめ文、通ひかよびて、いかなる朝にかありけむ、
夕ぐれのながれくるまを待つほどに涙おほひの川とこそなれ

返し、